

助成年度：平成9年度

[所属] 京都大学大学院 農学研究科

[役職] 教授

[氏名] 田中 克 (他計6名)

[課題]

有明海筑後川河口域に生息する絶滅が危惧される魚類の 近年における出現動向

[内容]

有明海の中で最も重要な魚類資源であるスズキに焦点を当て、その遺伝的特異性、河川溯上の生理・生態的背景、淡水遡上履歴の解析、河口域の餌環境特性を中心に調べた。また、筑後川河口域に出現する幼稚魚群集の季節的変化や経年変化を調べ以下の結果を得た。

- 1) 有明海産スズキは中国大陸沿岸～韓国西岸に分布するタイリクスズキと有明海以外の日本周辺海域に分布するスズキの中間的な遺伝的特性を有し、AFLP法による核遺伝子の分析より、過去に生じた両種の雑種に起源をもつことが確認された、このような事例は脊椎動物ではほとんど知られておらず、極めて興味深い現象として注目される。
- 2) スズキ仔稚魚の耳石日周輪観察の結果、ふ化後3ヶ月近くを経過した体長17～18mm頃に淡水域へ移入することが、また、耳石微量元素の分析により淡水域への出入りの実態が個体レベルで確認された。
- 3) 筑後川汽水域（塩分0.1～15）には、大型の汽水性かいあし類 *Sinocalanus sinensis* が大量に分布し、スズキ・ヤマノカミ・エツ・シラスウナギ・アユなどの海と川を往復する魚種にとって、筑後川河口域はとりわけ重要な成育場であることが判明した。
- 4) 筑後川河口域における周年調査（の前半部：3～10月）より、これまで有明海固有種とされてきたエツ・アリアケシラウオ・アリアケヒメシラウオ・ヤマノカミ・ムツゴロウ・ワラスボなどの仔稚魚の出現動態が明らかになりつつある。
- 5) 1980年より1998年まで毎年3月に実施してきた稚魚網調査より、アリアケヒメシラウオ・エツ・ヤマノカミ・スズキ・アユ・シラスウナギ等の経年的な出現動向に関するデータが整理されつつある。